

# 目の前のごみ拾える人に

「ベルマール」社長・理事長 眞壁 潔 さんに聞く

サッカーJ1リーグ昇格を目指し熱い戦いを演じているプロ集団「湘南ベルマール」。湘南地域の特性を生かしたスポーツの普及・振興の役割を担い創設された「湘南ベルマールスポーツクラブ」。二つの「ベルマール」の一方は株式会社で、もう一方はNPO法人。両方のトップ、社長と理事長を兼ねる眞壁潔氏(50)を訪ね、「ベルマール」の運営について聞いた。



——眞壁さんがベルマールに関係するようになって十三年がたちます。関係するにあたって、どんな点に期待しましたか。

——眞壁さんがベルマールの前身は、一九六八年創設の藤和不動産サッカー部。その後、「フジ工業サッカー部」を経て九三年「ベルマール平塚」に。その間、日本リーグ優勝三回、天皇杯も二回制した名門。九四年にはJ1リーグ昇格を果たし、同時に天皇杯制覇、その後も世界中の中田英寿を擁

眞壁 期待するものなど何もなかった。古くからの知り合いだった国会議員の河野太郎さんに頼まれたのがきっかけだったが、親会社が撤退表明し、ベルマールが存廃の瀬戸際に立たされるという緊急事態だったので、まずチームを存続させる、そのことしか頭になかった。

## 存廃の危機から13年

「湘南ベルマール」は誕生後、しばらくは低迷期に。その一方で、〇二年にJ1リーグ初のNPO法人「湘南ベルマールスポーツクラブ」を創設、総合型スポーツクラブとして、サッカーだけでなくビーチバレーチーム、トライアスロンチームなどが次々生まれ、湘南地域のスポーツの普及・振興に努めた。一方、「湘南ベルマール」も〇九年に勝ち点1差でJ2リーグ三位となり、念願のJ1復帰を果たした。

ベルマールができて、多くの市民がサッカーを通してさまざまな感動を共有していました。クラブをなくすことは一瞬ですが、再び生み出すことはまず不可能です。都内に住んでいた私は、ふるさとに芽生えた「スポーツ文化」の価値を強く感じていました。

するなど気を吐いた。しかし九八年、長引く不況から親会社のフジが撤退表明、有力選手の移籍などから戦力ダウンし、九九年にJ2に降格した。その年、存続検討委員会が出来、眞壁さんもその一人に加わった。——その結果、九九年暮れ、市民ク

## ファンの底辺広がる

——NPOの創設で、ベルマールを愛する人の底辺が広がっているように思えます。J1リーグ復帰と合わせ、約束は果たせましたね。

眞壁 J1に復帰し約束は果たしたものの、1年で降格してしまっ(苦笑)。また頑張ります。

「湘南ベルマールスポーツクラブ」には、スポーツの苦手なおばあちゃんのための健康づくり教室がある。湘南の地にふさわしいビーチバレーチームもある。孫が通うサッカースクールもある。その中心にベルマールがあるわけで、おばあちゃんも、ビーチバレーファンも、孫も、自然とベルマールを応援するようになるでしょう。「湘南ベルマール」と「湘南ベルマールスポーツクラブ」は一体なのです。

——サッカースクールも大きな成果を上げていますね。

眞壁 大きなスポンサーが付いているチームは、選手をスカウトすることができているが、私たちのようなクラブチームは難しい。しかし今、ベルマールの先発メンバーの五人は自前の育成組織から育った選手です。誇りに思っています。

また、育成部門のコーチには「サッカーに勝つて満足してしまう子供にするな。キック力の強い子供より、目の前のごみを拾える子供に育てよ」と指導している。

サッカーは偶発性の強い、想定外の展開が起きやすい競技です。「あいつがちゃんとボールを蹴っていれば……」「ボールを止めていれば……」は通用しない世界だ。一人ひとりが、黙って目の前のごみを拾うように、言い訳せず、人の責任にしないプレーをすることが大切。そのような子供に育っていることも誇りです。優秀な選手を、素晴らしい子供たちを私たちは育てています。

「湘南ベルマール」は誕生後、しばらくは低迷期に。その一方で、〇二年にJ1リーグ初のNPO法人「湘南ベルマールスポーツクラブ」を創設、総合型スポーツクラブとして、サッカーだけでなくビーチバレーチーム、トライアスロンチームなどが次々生まれ、湘南地域のスポーツの普及・振興に努めた。一方、「湘南ベルマール」も〇九年に勝ち点1差でJ2リーグ三位となり、念願のJ1復帰を果たした。

眞壁 かわり合う割合からいえば、ベルマールが六割、本業が四割ぐらいか。

ベルマールは地域の財産であり、公共性が高い。一人の人間が長くやっていては、一つの色に染まってしまふ。ファンは、同じ器に盛られた同じ料理をいつも食べさせられるわけで、飽きがくるし、障害も起きる。強い意志と情熱を持つ人間に引き継ぎ、早く本業に専念したい気持ちはあるが、なかなか後継者が見つからないのが実情だ。

——赤い羽根に思い出はありますか。眞壁 僕らの子供のころは、赤い羽根を胸に付けるのは普通のことだったが、今はなかなか見かけない。それに、昨今は企業が資金を出すに当たって、企業名を隠したがる傾向もありますね。余裕があると思われるのが困るのでしょうか。堂々と募金をし、社会で評価を受けたいのには。赤い羽根だけでなく、スポーツ界への資金も思うように集まりません。残念で仕方ありません。

聞き手・大谷 義輝

神奈川県共同募金会常務理事



熱い声援でチームを後押しするサポーター  
＝Shonan BMW スタジアム平塚



サポーターの声援に応えた「勝利のダンス」  
＝Shonan BMW スタジアム平塚